

『ことわざ・慣用句における誤用の考察』

—— その原因と世代間にみる違い ——

四十回生 松田明子

はじめに (省略)

第一章 題材について

第一節 この題材を選んだ理由

「ことわざ」とは、古くから人々に言いならわされてきた言葉である。日本語、特に俗語を用いて経験に基づく、実際のな知識を短句の中にもりこみ、人々の心を動かし、流通した言語作品としての連語である。従って、時代や社会、人々の生活と大きな関係を持っている。表者はこれに有効に用い、理解者は素早く受け止め、反応を示すことにより、万言を費やす労も省け、共通の座興をもちあげ、言語生活を効果的になすことができる。人々によって作られ、人々によって受けつがれ、人々の心をとらえてきたからこそ、ことわざは現在もこの時代生き続けているわけである。

しかし、ことわざの意味が変化する理由もここにある。人々に使われない言葉は消え去って行くし、言い誤って伝えられる言葉もある。また、その言葉が作られた時代と、現代との間には、長い年月が流れており、社会生活も変わっている。ことわざの解釈にずれが生じることはいたしかたないことであろう。つまり、それらの言葉はいろいろな理由で必然的に変化するのである。そしてそれらの変化は、現在では誤用と呼ばれ、私たちの言語生活の中に正用とともに存在している。

変化するのは言語の本質である。私はその本質に興味をもち、ことわざ・慣用句の誤用の原因と世代間にみる違いをアンケートを通して考えてみたいと思った。

第二節 誤用について (省略)

第二章 誤用の原因

世間一般に、ことわざ・慣用句の誤用を嘆く声が多いが、実際のところ、誤用はどれ程広まっているのだろうか。その実態を知るために、アンケート調査を行い、その結果を数字にしてみた。また、その数字を世代別に分析すれば、世代間に見る誤用の違いが分かるのではないだろうか。

そこでまず、調査票を作るため、誤用に関する本の中から誤用例を集めてみた。

ことわざ・慣用句の誤用にも、いろいろな種類がある。まず、誤用の種類を大きく、言語形式、表記、意味、用法の四つに分け、それぞれの誤用の原因を考えてみようと思う。

言語形式の誤用とは音形式が似ているためや混用によるものなどである。

表記の誤用とは、文字通り、ことわざ・慣用句が誤って書かれたものである。

意味における誤用の原因としては、後半省略、類推、文字からの影響、混同、マスコミなどの影響などがあげられる。

用法における誤用は、使い方が間違っていることにより怒るもので、使う相手や使う状況に大きくかかわってくる。

このように、誤用となる原因を分け、分析していこうと思ふ。

第一節 言語形式における誤用

一 音形式が似ているための誤用

例として「とりつく島もない」の「シマ」を「ヒマ」と思い込んでいるものや、「出る杭は打たれる」「のクイ」が「クギ」になったり、「焼け棒杭に火がつく」の「ボックイ」が「ボックリ」になるなどである。(省略)

二 混用による誤用

例えば、「汚名挽回」や「二の舞を踏む」などがそれぞれある。聞き流したり、見落したりしがちであるが、これらは二つの言葉を混用してしまっている例である。「汚名挽回」は「名譽挽回」と「汚名返上」の混用であるし「二の舞を踏む」は「二の舞を演じる」と「二の足を踏む」の混用である。(省略)

第二節 表記における誤用

一 漢字の間違い

「名は体をあらわす」の「体」を「態」としたり「出端をくじかれる」の「出端」を「出鼻」としたり、「見得を

切る」の「見得」を「見栄」としたり「日の出の勢い」の「日の出」を「火の出」とするなど、例をあげればきりが
ない。(省略)

第三節 意味における誤用

三一 後半が省略されたことによる誤用

「情けは人の為ならず」は「人に情けをかけるのは、その人の為ばかりではなく、まわりまわって結局は自分に返ってくる」という意味である。しかしこれを「情けはその人をあまやかすのでよくない」といった解釈をする者が非常に多い。

しかし、もしこのことわざが「情けは人の為ならず、巡り巡って己が身の為」であったならばどうだろうか。一〇〇%の者が正用の解釈をするだろう。明らかにこの誤用は後半が省略されて伝えられてきたために起こるものである。(省略)

三二 類推による誤用

例えば「立て板に水」という言葉について考えてみる。ある人は、立て板に水が流れ落ちる場面を想像し、またある人は、立てた板に向かって、バケツか何かで思いきり水をかける場面を想像したとする。前者は板の上を滑るよう

に流れ落ちる水の様子から「弁舌がよどみなく、すらすらとうまいこと」と解釈し、後者は、立てた板に水をかけても水はそのまま下に落ちるわけで、何度くり返しても同じことであるということから「いくらいってもむだなこと」と解釈するのである。

三三 文字からの影響による誤用

「気の置けない人」は「遠慮しなくてもいい人」のことだが、実際には「気の許せない人、油断できない人」と、逆の意味にとられていることも多い。これは「気の置けない」の「置けない」という否定の言葉の影響である。語形からいって「気の許せない、うちとけられない、心の安まらない」などと同じで、悪い意味の言葉である、というイメージが植えつけられる。そして「気の置けない人」|| 「気を置くことができない人」|| 「気の許せない人、油断ならない人」となる。(省略)

三四 混同による誤用

例えば「琴線にふれる」と「逆鱗にふれる」とは後半部分と同じである。意味としては、「琴線||心の奥にこめられていた真情」「逆鱗||竜のあごの下に、逆さにはえた鱗」と何の関連もない。しかし、「琴線にふれる」が「逆鱗に

ふれる」に重なり、意味までも「怒りをかうこと」と混同してしまふのである。(省略)

三一五 マスコミなどの影響による誤用

例えば「あっけらかん」ということばであるが、本来の意味としては「事の意外さにあきれて、口をあけてぼかんとしている様子」であった。しかし、ほとんどの人は「からっと明るい様子」と思っているのではないだろうか。辞書を見ると、①に本来の意味が、②に「けろりとしたさま」とある。また辞書によっては①だけしか載せていないものや、①、②を載せ、②は最近の使い方としているものもある。テレビのCMソングでも「あっけらかんから あっけらかん、私は日本の調子者」というフレーズがあり、「あっけらかん」が「からっと明るく、けろりとしている様子」であるということ強く印象づけている。(省略)

第四節 用法における誤用

四一 用法の誤用

例えば「役不足」は「彼女が主役に選ばれるなんて……彼女には役不足でできっこないわ」や「私には役不足で務まりません」という誤用が多い。これは「役」と「その人の力量」の相対的な軽重関係の取り方が誤っているために

起こる。本来の意味は①自分に割り当てられた役に対して不満を抱くこと②その人の力量に比べて役が軽すぎることである。つまり、その人の力量が役を上回っている状態の時に使う言葉である。それを、「役」||「その人の力量」と解釈したため「役不足」||「その人の力量不足」となり、用法までもひっくりかえってしまったのである。謙遜するつもりで「私には役不足で……」などと言えば、非常に傲慢な態度をとったことになるわけである。(省略)

第三章 アンケートについて

第一節 調査票について (省略)

調査票は巻末の通りである。

回収した数は、中学生七〇名、大学生七六名、二十代(大学生は省く)四五名、三十代二五名、四十代一九名、五十代一七名、六十代二三、七十代以上一八名の計二九三名であった。

第二節 アンケートを行う前の予想(略)

- (1) 高齢者ほどことわざ・慣用語をよく知っている。
- (2) 中学生の誤用が一番多い。
- (3) 二十代より大学生の方が誤用が少ない。

(4) 「情けはひとの為ならず」や「気の置けない人」の誤用は少ないのではないか。

(5) 古臭い言い方は誤用が多い。

(6) 「悪びれず」|| 「反省の色も見せず、開き直って」や「あっけらかん」|| 「からっと明るい様子」と思っている人は一〇〇%近いのではないか。

(7) 「耳ざわりがいい」「全然いい」などの誤用は若い世代に多いのではないか。

第三節 調査結果

調査結果を世代別に見るため、次のように世代分けした。

結果は表1の通りである。

世代別の平均誤用パーセントを見ると、

A (中学生) 五三・六%

B (大学生) 四〇・二%

C (二十代) 四八・一%

D (三十・四十代) 三七・九%

E (五十・六十代) 三四・〇%

であり、ACBDEの順で誤用が多い。B C間に入れ替わりがあるが、全体的には、年代があがるにつれ、誤用は少なくなるといえる。

第四章 結果分析

第一節 予想との対比

アンケートを行う前に考えた(1)から(7)までの予想と調査結果を比べてみたい。

(1) 全体的に見るとやはり高齢者ほど誤用が少なかった。

E (五十・六十代) 三四・〇%

しかし、「雨後のたけのこ」や「手をそめる」のように他の世代とあまり変わらないものや「一姫二太郎」、「筆が立つ」のように高齢者の方が誤用が多いものもあった。よって、すべてにおいて、ことわざ・慣用句は高齢者ほどよく知っているとは言えない。

(2) やはり中学生の誤用が多かった。

A (中学生) 五三・六%

中学生には難しく、分からないものもたくさんあり、無回答のものも多いのではないかと思っただが、選択形式だったため、回答率は非常に良かった。しかし、誤用は多かった。ただし、すべてにおいて誤用が多いわけではなかった。「悪びれず」「流れに棹さす」「あっけらかん」のように、わりあい良く知られており、誤用も多いと思われるものの方が。他の世代と比べて誤用が少ない場合もある。

A	B	C	D	E
中学生	大学生	20代	30・40代	50・60代

(3) 予想通り大学生の方が二十代よりも誤用が少なかった。

B (大学生) 四〇・二% C (二十代) 四八・一%

(4) 「情けは人の為ならず」や「気の置けない人」の誤用が少なかったのは、Bだけであった。依然として「情けは人の為ならず」の誤用は多く、Aでは八〇%を越えており、CDでも七〇%以上、Eでさえも四〇%を越えている。これは単に誤用と気付く機会があったかどうかである。Bは誤用と気付く機会があつたため、知識として定着したが、他の世代はやはり未だに誤用と気付く機会がなかったわけである。「気の置けない人」も同様である。

(5) 「火中の栗を拾う」「五月の鯉の吹き流し」「雨後のたけのこ」「なさぬ仲」など現在はあまり耳にしないものは、やはり誤用が多かった。

(6) 「あっけらかん」はBでは九六%と非常に多く、Aを除くと約八割の人に「あっけらかん」||「からつと明るい様子」が定着している。しかし、Aでは「あっけらかん」||「口をあけてぼかんとしている様子」と解釈する者が約六割と、他の世代と全く逆になっている。「悪びれず」に関して同じ傾向であるといえる。

(7) 他の世代に比べるとやはりAの誤用が多い。実際には、もっと使われているのかもしれないが、少なくとも、正

用誤用の意識の上では、誤用はそれほど広まっていないことが分かる。

第二節 世代間に見る誤用の違い

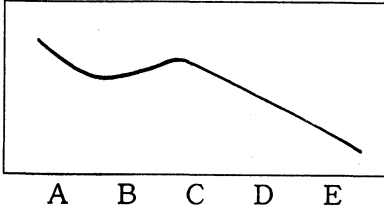
調査結果を数字で表したのが表1であるが、より世代間に見る誤用の違いを分かりやすくするため、誤用のパーセントをグラフで表してみた。(グラフ1参照)

グラフ1を見ると、若い世代に誤用の多いもの、あるいは、高齢者に誤用の多いものなど、グラフの描く曲線もそれぞれのことばによって違いがあることが分かる。

そこでグラフ1をもとに世代間に見る誤用の違いを大きくパターン分けしてみた。それが次にあげる1~8のパターンである。

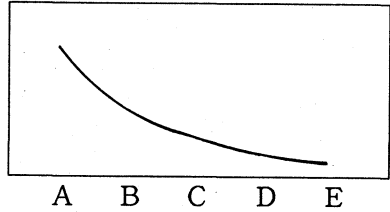
ことわざ・慣用語の誤用の世代間に見る違いをパターン分けすることにより、それぞれの特徴を見つけ出すことができる。

〈パターン2〉



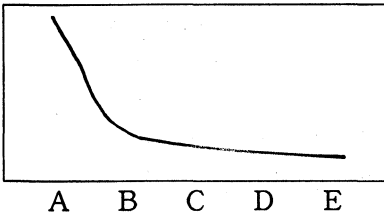
誤用が少ない。
 形・・・AとCに誤用が多い。Bで誤用が少ない。
 解釈・・・本来ならへパターン1と同じ形になるところだが、Bで誤用が少なくなっている。これは、Bが誤用と気付く機会があり、正用の知識が定着していることを表している。問題としてよく取り上げられる誤用例にこのパターンが多い。
 典型的例・・・「情けは人の為ならず」「気の置けない人」「十指にあらまる」

〈パターン1〉



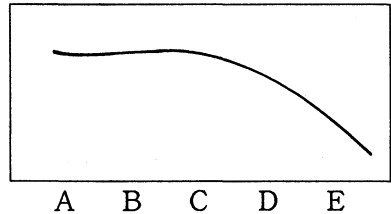
へパターン1
 形・・・AからEへ行くに従い、誤用は少なくなる。
 解釈・・・若い世代にはなじみが薄く、あまり使われない言葉。高齢者が使うような古臭い言葉である。
 典型的例・・・「五月の鯉の吹き流し」「洪皮がむける」「なまぬ仲」「毒食わば皿まで」
 へパターン2
 形・・・AとCに誤用が多い。Bで誤用が少ない。

〈パターン4〉



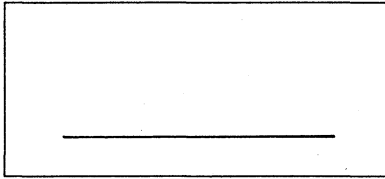
形・・・他の世代に比べてAの誤用が非常に多い。
 解釈・・・中学生にとっては、ほとんどなじみのないことばかりであり、その場で考えて選択したと思われる。よって、文字からうける語感が強く働いている。
 典型的例・・・「命の洗濯をする」「目から鼻に抜ける」「下にも置かぬ扱ひ」「枯れ木の賑わい」「顎をなでる」

〈パターン3〉



へパターン3
 形・・・DからEにかけて、誤用が急に少なくなる。
 解釈・・・高齢者にはなじみのある言葉で正用が定着しているが、若い世代には誤用が多い。この急激な変化は世代間の受け渡しに充分に行われなかったことを表しており、世代間で解釈に大きな食い違いが生じる。
 典型的例・・・「火中の栗を拾う」「立て板に水」「顎が落ちる」「さいさが悪い」
 へパターン4

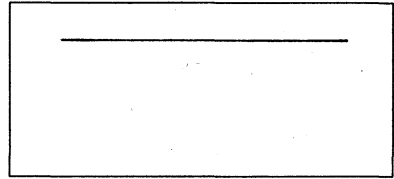
〈パターン6〉



A B C D E

誤用が少ない。
 形・・・全体的に見て、どの世代も誤用が多い。
 解釈・・・高齢者であってもあまり使わないようなもの、あるいは、どの世代でもよく使うが誤用が定着しているもの。後者はこれから先正用とされる可能性もある。
 典型的例・・・「雨後のたけのこ」「手をそめる」「芸は身を助ける」「汚名挽回」
 〈パターン6〉
 形・・・全体的に見て、どの世代も誤用が少ない。
 解釈・・・少数の間で誤って使われており、新しい誤用として問題となっているが、実際に調べてみると、その誤用は広まっていない。しかし、誤用と分かっているながらも日常会話では使っている可能性もある。また、少数ながら年少者にこの誤用が見られるので、これから先、増える可能性もある。
 典型的例・・・「全然いい」「耳ざわりが良い」

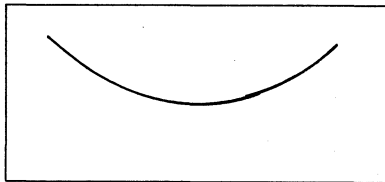
〈パターン5〉



A B C D E

誤用が多い。
 形・・・全体的に見て、どの世代も誤用が多い。
 解釈・・・高齢者であってもあまり使わないようなもの、あるいは、どの世代でもよく使うが誤用が定着しているもの。後者はこれから先正用とされる可能性もある。
 典型的例・・・「雨後のたけのこ」「手をそめる」「芸は身を助ける」「汚名挽回」
 〈パターン6〉
 形・・・全体的に見て、どの世代も誤用が少ない。
 解釈・・・少数の間で誤って使われており、新しい誤用として問題となっているが、実際に調べてみると、その誤用は広まっていない。しかし、誤用と分かっているながらも日常会話では使っている可能性もある。また、少数ながら年少者にこの誤用が見られるので、これから先、増える可能性もある。
 典型的例・・・「全然いい」「耳ざわりが良い」

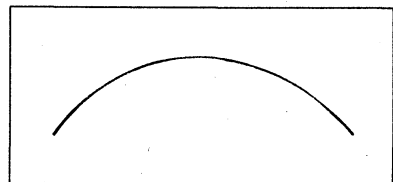
〈パターン8〉



A B C D E

誤用が多く、CからEにかけて誤用が多くなる。
 形・・・AからBにかけて誤用が多くなり、CからEにかけて誤用が少なくなる。BCでの誤用が多い。
 解釈・・・よく知られており、よく使われている言葉だが、誤用が広まっているものが多い。BCで誤用が多いのは、普段自分が耳にしたり、使ったりしている状況から判断したためであろう。Aで誤用が少ないのは正用を知っていたためでなく、普段よく使われている誤用を知らなかったためと思われる。
 典型的例・・・「悪びれず」「流れに棹さす」「あっけらかん」「役不足」
 〈パターン8〉
 形・・・BCで誤用が少ない。Aで誤用が多く、CからEにかけて誤用が多くなる。
 解釈・・・Aで誤用が多いのは知識不足のためであると思われるが、高齢者になるにつれて誤用が多くなるのは、その誤用が昔からのものであり、誤用の方が高齢者には定着しているためと思われる。
 典型的例・・・「一姫二太郎」「筆が立つ」「蛙の子は蛙」「板についている」

〈パターン7〉



A B C D E

誤用が少なくなる。
 形・・・AからBにかけて誤用が多くなり、CからEにかけて誤用が少なくなる。BCでの誤用が多い。
 解釈・・・よく知られており、よく使われている言葉だが、誤用が広まっているものが多い。BCで誤用が多いのは、普段自分が耳にしたり、使ったりしている状況から判断したためであろう。Aで誤用が少ないのは正用を知っていたためでなく、普段よく使われている誤用を知らなかったためと思われる。
 典型的例・・・「悪びれず」「流れに棹さす」「あっけらかん」「役不足」
 〈パターン8〉
 形・・・BCで誤用が少ない。Aで誤用が多く、CからEにかけて誤用が多くなる。
 解釈・・・Aで誤用が多いのは知識不足のためであると思われるが、高齢者になるにつれて誤用が多くなるのは、その誤用が昔からのものであり、誤用の方が高齢者には定着しているためと思われる。
 典型的例・・・「一姫二太郎」「筆が立つ」「蛙の子は蛙」「板についている」

このように世代間にみる誤用の違いも、いくつかのパターンに別れることが分かった。アンケートを行う前は、ことわざ・慣用句の誤用のパーセントがパターンに別れるとは、全く予想していなかった。当然若い者ほど誤用が多く、高齢者になるほど誤用が少なくなるはずだ、と思っていたからである。

しかし、ことわざや慣用句には、正用をしかるべき場で学習する機会のあるものと、ないもの、誤用の広まっているものといないものがあり、しかも、正用、誤用のどちらが身につくかは特定のことわざ・慣用句によっていつの時代でも同じというのではなく、時代や社会の状況によって異なる。そして、一度身についたことわざ・慣用句は「知らない」と恥」という気持ちから、知ったふりを続けてしまいい、個人のなかに定着してしまう傾向にある。

誤用が定着してしまった場合は、新たに正用を学習する機会が来るまでは、誤用を身につけたままとなる。

時代の流れと社会の状況という大きな枠組みの中で、個々のことわざ・慣用句が、いつ身につけられるか、最初に定着するのが正用か誤用か、という二点が基本となって、上記の八つのパターンが生じると考えられる。

1〜8のパターンでそれぞれ典型的な例をあげたが、その他のアンケートに用いた誤用例も、大まかな見方をすれ

ば1〜8のパターンに属するか、あるいは、二つ、三つのパターンにまたがって属していると言える。

第五章 日本語教育的考察

ことわざや慣用句は、日本人であっても間違っても使っている場合が多い。まして外国人にとっては非常に分かりにくい。分かりにくくはあるが、日本語を習得し、その後、日本で生活したり、日本の文化に興味を持ち研究する者にとっては、これらのことばは非常に興味深いものである。なぜならば、ことわざや慣用句は日本人の心と強く結びついており、そこに日本人の精神が生きていているからである。

外国人がことわざ・慣用句を学習する場合、日々の言語生活の中から自然に覚えるのではなく、やはり、きちんとした正しい知識を学習することが大切である。日本人の場合、そういう過程を踏まず、自然とことばを覚えるために逆に誤用も多くなるといえる。また、日本人はそのことばを自分勝手に解釈したり誤用であっても認めず、自分の考えが絶対に正しいとしたりする。その点、日本語学習者は、白紙の状態に正しい知識を植えつけることができ、疑問に思ったことや、分からないことも明らかにしやすい。しか

し、省略された形や理屈に合わない表記などは特に難しいと思われる。語源などのあるものはそれも紹介し、印象づけるとよいだろう。

ことわざ・慣用句を指導するにあたって、一番大切だと思われるのは使い方である。どういう場面でのどのように使うのかを、ふさわしい例文を指示し指導することである。

また誤用の多いことわざ・慣用句については、どのよう
に誤った解釈をしているのかを説明しておいたほうがよい
だろう。

ことわざや慣用句があるのは、なにも日本語ばかりではない、表現は違っていても同じような内容のことばがどの言語でも存在する。日本語学習者の母語のことわざ・慣用句と対比して指導するのも一つの方法である。

おわりに

私たちは日本語を母語としている。毎日、話したり、聞いたり、読んだり、書いたりして日本語に慣れ親しんでいる。あまりにも自然に日本語が身についたため、言葉について疑問に思うことすらなかった。そのまま成長し、日本語という分厚い屏に囲まれ生活している。いつも自分を中心にして日本語を見、また、分厚い屏に囲まれているので誤りに気付かない。誤りに気付くためには、自分から屏の外に出ようとするか、誰かが外から屏を壊し新しい風を吹き込むしかない。

つまり、自分から日本語に興味を持ち、日本語を客観的に見て誤りに気付くか、誰かが何らかの形で誤りに気付かせてくれるかなのである。今回、ことわざや慣用句の誤用について考えたが、慣れのままに使ってしまうのは日本語すべてにおいて言えることである。正用、誤用にかかわらず、自分の母語である日本語を客観的に見ることの重要さを再確認すると同時に、客観的に見ていくと、意外なところにパターンが現れることを知った。

(回答例記入)

卒業論文のためのアンケートにご協力下さい。
ことわざや慣用語などに対する意識調査です。 年令 ()

⑩ 次のことばはどういう意味でしょう。正しいと思うものに○をつけてください。

- | | |
|-----------|---|
| しのぎを削る | ① はげしく争う
2 貧しい生活をする |
| 砂を噛むような思い | 1 くやしい思い
② あじけない思い |
| 火中の栗を拾う | ① 他人の為に危険にまきこまれること
2 むちゃをすること |
| 悪びれず | ① おどおどしないで
2 ひらきなおって |
| 流れにさからうこと | 1 流れにさからうこと
② 流れにうまくのること |
| 他山の石 | 1 自分とは関係のないこと
② つまらぬ人の言行であっても自分の知徳を向上させる役に立つこと |
| 一姫二太郎 | 1 女の子一人と男の子二人の三人兄弟
② 最初は女の子で次に男の子を産むのがよい |
| あっけらかん | ① 口をあけてぼかんとしている様子
2 からっと明るい様子 |
| 爪に火をともす | ① 非常にけちなこと
2 非常に貧乏なこと |
| 命の洗濯をする | ① 気晴らしして日頃の苦勞を忘れること
2 心を入れかえてまっとうな人間になること |
| 目から鼻へ抜ける | ① 頭の回転がすばやく、とびぬけて賢いこと
2 だらしないこと |

- 下にも置かぬ扱ひ
- 1 全然相手にしてくれないこと
 - ② 非常に丁寧な扱ひ
- 毒気が抜かれる
- 1 人間がまるくなること
 - ② 攻撃しようとしていた気持ちがうせること
- 十指にあまる
- ① 10以上
 - 2 10以下
- 立て板に水
- ① 弁舌がよどみなく、すらすらとうまいこと
 - 2 いくら言ってもむだたということ
- 情けは人のためならず
- 1 その人をあまやかすので、良くない
 - ② まわりまわって、自分のためになる
- 枯れ木も山の賑わい
- ① 役に立たないものでも、ないよりはまし
 - 2 その人がいると非常に賑わうこと
- 柳に風と受け流す
- ① すこしも逆らわない
 - 2 いくら言われてもいうことをきかないこと
- 筆が立つ人
- 1 字がうまい人
 - ② 文章がうまい人
- 琴線にふれる
- 1 怒りをかうこと
 - ② 心を揺り動かされること
- 毒食わば皿まで
- ① とことん悪事をくり返すこと
 - 2 途中で止めずに最後までやりとうすこと
- 器量をさげる
- 1 容姿がおとろえる
 - ② 人物の評価をさげる
- 胸がさわぐ
- ① 不吉な予感のため不安になる
 - 2 喜びで胸がわくわくする
- 眉につばをつける
- 1 気合いを入れる
 - ② だまされないようにする
- 五月の鯉の吹き流し
- ① 腹の中にかくし事がないこと
 - 2 右から左に聞き流すこと
- 海の物とも山の物ともつかぬ
- ① 結果がどう出るか分らないこと
 - 2 出どころがどこかわからないこと

雨後のたけのこ

- 1 成長が早いことのとえ
- ② あいついで物事が発生することのとえ

顎をなでる

- ① 得意げな様子
- 2 かわいがること

顎が落ちる

- 1 非常におかしいこと
- ② 料理が非常においしいこと

手をそめる

- 1 悪事をはたらく
- ② あることをし始める

② 正しい用法だと思ったら○をつけて下さい。いくつ○をつけてもかまいません。

振り袖姿が板についている () 背広姿が板についている (○)

彼は気の置ける人だから、なんでも相談したらいいよ。 ()

彼は気の置けない人だから、なんでも相談したらいいよ。 (○)

彼女は渋皮がむけて素敵になった (○) 彼は渋皮がむけて一人前になった ()

なさぬ仲の恋人同士 () なさぬ仲の義母と継子 (○)

乗りかかった舟だがやはりやめておこう ()

乗りかかった舟なので最後までやりとおそう (○)

芸が身を助けるほどのしあわせもの () 芸が身をたすけるほどのふしあわせ (○)

彼女が主役に選ばれるなんて・・・彼女には役不足でできっこないわ ()

彼女が主役だと思っていたのに・・・他の役じゃ彼女には役不足だわ (○)

ダイエット中なので、心を鬼にして甘いものを食べないようにしている ()

あまやかしてはいけないと思い、わたしは心を鬼にして息子を叱った (○)

彼は父親のように立派な弁護士になった。蛙の子は蛙とはよくいったものだ。()

彼は結局父親のような平凡なサラリーマンになった。蛙の子は蛙だ。(○)

さいさきが良い(○) さいさきが悪い()

耳ざわりが良い音楽() 耳ざわりな音楽(○)

蟻の這い出るすきまもない(○) 蟻の入り込むすきまもない()

押しも押されぬ() 押しも押されもせぬ(○)

汚名挽回() 汚名返上(○)

全然よくない(○) 全然いい()

㊦ 次の()の中に適当な言葉を入れてください。

とりつく(島)もない 出る(杭)は打たれる

二の舞を(演ずる) 焼け(棒杭)に火がつく

ご協力ありがとうございました。

熊本女子大学 国文学科4年 松田明子

㊦の誤用

とりつく()もない・・・暇

出る()は打たれる・・・釘

二の舞を()・・・踏む

焼け()に火がつく・・・ぼっくり
石

これらの誤用が非常に多かった。

ことわざ・慣用句	対象	中学生の 誤用の%	大学生の 誤用の%	20代の 誤用の%	30・40代の 誤用の%	50・60代の 誤用の%	平均 %
しのぎを削る		67 (47)	15 (11)	42 (19)	11 (6)	18 (7)	31
砂を噛むような思い		80 (56)	52 (40)	62 (28)	41 (18)	35 (14)	54
火中の栗を拾う		73 (51)	71 (54)	69 (31)	73 (32)	45 (18)	66
悪びれず		44 (31)	67 (51)	67 (30)	55 (24)	45 (18)	56
流れに棹さす		54 (38)	71 (54)	78 (35)	66 (29)	53 (21)	64
他山の石		47 (33)	42 (32)	49 (22)	48 (21)	60 (24)	49
一姫二太郎		23 (16)	20 (15)	33 (15)	39 (17)	53 (21)	34
あっけらかん		37 (26)	96 (73)	89 (40)	80 (35)	70 (28)	74
爪に火をともし		45 (32)	60 (46)	66 (30)	57 (25)	30 (12)	52
命の洗濯をする		72 (51)	11 (8)	24 (11)	11 (5)	5 (2)	25
目から鼻に抜ける		57 (40)	25 (19)	25 (11)	7 (3)	15 (6)	26
下にも置かぬ扱い		63 (44)	20 (15)	36 (16)	18 (8)	15 (6)	30
毒気が抜かれる		26 (18)	42 (32)	40 (18)	36 (16)	20 (8)	33
十指にあまる		30 (21)	17 (13)	51 (23)	45 (20)	18 (7)	32
立板に水		63 (44)	46 (35)	71 (32)	27 (12)	7 (3)	43

() 内の数字は人数

ことわざ・慣用句	対 象	中学生の 誤用の%	大学生の 誤用の%	20代の 誤用の%	30・40代の 誤用の%	50・60代の 誤用の%	平均 %
情けは人のためならず		8 4 (59)	2 8 (21)	7 8 (35)	7 2 (32)	4 8 (19)	6 2
枯木も山の賑わい		4 7 (33)	5 (4)	2 0 (9)	2 (1)	1 5 (6)	1 8
柳に風と受け流す		4 7 (33)	4 9 (37)	5 3 (24)	3 2 (14)	3 0 (12)	4 2
筆が立つ人		7 3 (51)	2 6 (20)	2 2 (10)	3 0 (13)	4 5 (18)	3 9
琴線にふれる		4 3 (29)	9 (7)	2 9 (13)	3 6 (16)	3 0 (12)	2 9
毒食わば皿まで		7 1 (50)	5 5 (42)	5 3 (24)	5 2 (23)	4 0 (16)	5 4
器量をさげる		2 8 (20)	1 2 (9)	4 (2)	7 (3)	2 0 (8)	1 4
胸がさわぐ		4 5 (32)	1 0 (8)	2 4 (11)	1 1 (5)	1 0 (4)	2 0
眉につばをつける		5 4 (38)	3 0 (19)	4 9 (22)	2 3 (10)	4 0 (16)	3 9
五月の鯉の吹き流し		6 7 (47)	4 3 (33)	4 0 (18)	3 0 (13)	3 5 (15)	4 3
海のものとも山のものともつかぬ		5 4 (38)	8 5 (65)	9 3 (42)	6 6 (29)	3 0 (12)	6 6
雨後のたけのこ		6 5 (46)	5 9 (44)	6 7 (30)	5 8 (23)	5 8 (23)	6 1
顎をなでる		4 7 (33)	4 (3)	1 3 (6)	2 3 (9)	2 0 (8)	2 1
顎が落ちる		4 3 (30)	4 1 (31)	5 8 (26)	2 0 (8)	8 (3)	3 4
手をそめる		7 4 (52)	6 4 (48)	6 9 (31)	6 8 (27)	6 3 (25)	6 8

ことわざ・慣用句	対 象	中学生の 誤用の%	大学生の 誤用の%	20代の 誤用の%	30・40代の 誤用の%	50・60代の 誤用の%	平均 %
板についている		67 (47)	20 (15)	13 (6)	32 (14)	30 (12)	31
気の置けない人		80 (56)	42 (32)	51 (23)	59 (26)	53 (21)	57
渋皮がむける		81 (57)	53 (40)	49 (22)	45 (20)	40 (16)	54
なさぬ仲		69 (48)	43 (31)	40 (18)	41 (18)	25 (10)	43
乗りかかった舟		34 (24)	5 (4)	24 (11)	7 (3)	8 (3)	16
芸は身を助ける		84 (59)	54 (41)	71 (32)	80 (35)	73 (29)	72
役不足		56 (39)	63 (48)	60 (27)	45 (20)	30 (12)	51
心を鬼にする		53 (34)	20 (15)	33 (15)	41 (18)	43 (17)	38
蛙の子は蛙		70 (49)	29 (22)	58 (26)	73 (32)	75 (30)	61
さいさきが良い		51 (36)	47 (36)	49 (22)	25 (11)	18 (7)	38
耳ざわり		23 (16)	3 (2)	4 (2)	2 (1)	23 (9)	11
蟻の這い出るすきまもない		41 (29)	57 (43)	71 (32)	39 (17)	28 (11)	47
押しも押されもせぬ		69 (48)	84 (64)	82 (37)	48 (21)	43 (17)	65
汚名返上		67 (47)	57 (43)	60 (27)	52 (23)	65 (26)	60
全然良くない		9 (6)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	3 (1)	3
誤用の平均 (%)		53.6	40.2	48.1	37.9	34.0	